

(3) エンドウ (サヤエンドウ)

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
 なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
根腐病 (<i>Fusarium</i>)	①太陽熱消毒を行う（土壌病害虫の防除法の項参照）。 ②他作物と２～３年の輪作とする。 ③多発ほ場への作付けは避ける。 【参考事項】 厚膜胞子は土壌中で長期間生存し、土壌伝染する。 土壌が乾燥していると発生しやすい。 地際部は細くくびれ、根は腐敗して容易に引き抜くことができる。
萎凋病 (<i>Fusarium</i>)	①土壌を還元状態にして太陽熱消毒を行う（土壌病害虫の防除法の項参照）。 ②発病株は抜き取り、適切に処分する。 ③収穫後の植物残さや栽培資材は、感染源にならないように適切に処分する。 ④管理機などにより、汚染土壌を未発生地に移動させないようにする。 【参考事項】 発病した株は、葉が黄化した後、萎凋し枯死する。萎凋した株の茎を縦断すると、導管部が地際から数十cmの高さまで褐変している。 根腐病に症状が似るが、茎の地際部皮層及び根の側根の腐敗は少なく、植物体は簡単には引き抜くことは出来ない。  発生ほ場  発病株  導管の褐変症状
褐紋病 (<i>Mycosphaerella</i>)	①発病ほ場は３年間他作物を栽培する。 ②排水を良好にする。 ③無病畑より採種する。 ④残さは感染源にならないよう適切に処分する。 ⑤発生の多いところでは、早播きを避け、寒害を受けないようにする。 【参考事項】 早播きして寒害を受けたもの、又は湿地に栽培したものに発病が多い。
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①施設では換気して結露を防ぐ。 ②被覆資材に防霧性のフィルムを使用すると植物体の濡れを予防できる。 ③被覆資材に近紫外線(UV-B)除去フィルムを使用すると孢子形成を抑制し、発病を抑制する。 ④多犯性であるため、被害茎葉、未熟堆肥、枯れ草などを畑の中や周辺から除去し、ほ場衛生に努める。 【参考事項】 主に施設栽培で冬から春に発生するが、露地栽培でも秋播きの作型で春に雨が多いと多発する。
うどんこ病 (<i>Erysiphe</i>)	①被害茎葉及び残さは除去する。 ②整枝をこまめに行い、風通しを良くする。 ③乾燥すると蔓延しやすいので、灌水して適度に湿度を保つ。 【参考事項】 葉、茎、さやなど地上部のあらゆるところに発生し、葉では下位葉から発生する。 暖冬の年や早春から収穫期に雨が多い年は発病が多くなる。  発病葉  発病莢
ナメグリバエ	①黄色粘着板を設置して成虫を捕殺する。 ②銀白色マルチを設置する。 ③被覆資材に近紫外線(UV-B)除去フィルムを使用すると成虫の飛来が少なくなる。 ④ほ場周辺に無防除の寄主植物や残さを放置しない。 【参考事項】 マメ科、アブラナ科、レタス、花き類に寄生する。 冬春どりの作型において、２～３月以降に多発し防除が必要となる場合がある。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
アブラムシ類	①銀白色マルチやシルバーテープを設置する。 ②在来天敵の働きを高めるため、化学合成農薬の使用種類を考慮する。 【参考事項】 エンドウヒゲナガアブラムシやマメアブラムシ等が寄生する。直接吸汁害の他に病原ウイルスを媒介するので、初期防除に努める。
ウラナミシジミ	①強い風により産卵が抑制されるので、9～10月の風の吹く方向に畝立をする。 ②施設では防虫ネットを設置し、成虫の侵入を防止する。 ③銀白色マルチを設置する。 【参考事項】 夏から秋にかけて発生が多くなる。 開花にともなって成虫が飛来するようになり、花卉、がく、幼莢に産卵する。 銀白色マルチは成虫に対する忌避効果が期待できる。
シロイチモジヨトウ	①卵塊やふ化直後の幼虫を見つけたら取り除く。 ②生育初期を好んで産卵する傾向があるため、播種後40日程度防虫ネットによるトンネル被覆をすると被害を軽減できる。 【参考事項】 卵塊は地際部に多い。葉裏に産み付けられることが多いが、支柱やネットに産卵する場合もある。 若齢幼虫は表皮を残すように集団で食害するため、被害葉は白変する。